HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	言語コミュニケーション
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	認知科学の展開, 西川泰夫; 阿部純一; 仲真紀子編著, (放送大学教材), ISBN: 9784595308062, pp.222-237
Issue Date	2008-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44798
Type	bookchapter
Note	11.
File Information	NKT2008_222-237.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

11 言語コミュニケーション

仲真紀子

概要

情報の伝達を広くコミュニケーションというが，より典型的なコミュニケーションは，音声を介した言語コミュニケーションであろう。ここでは会話を中心に認知科学的な研究を紹介する。まず，交互に話す，フィードバックを与える（応答，反応する），文脈を共有するといった，会話の特徴について述べる。その上で発話の理解について見ていくことにしよう。発話の研究は言語学との接点で行われてきた。そこで，哲学者であるオースティンや言語学者であるグライスやサールによる理論的枠組みを示し，これらの研究に触発されたいくつかの実証的研究を示す。さらにパラ言語情報（動きやイントネーションなどの，言語的情報以外の情報）の働きについても見ていこう。

キーワード：
会話，言語行為，会話の公準，適切性条件，間接的表現。

1．会話の特徴

文字によるコミュニケーションと音声によるコミュニケーションの違いは何だろうか。もっとも大きな違いは，文字が時間的にも距離的にも大きな範囲で情報伝達できるのに対し，音声は届く範囲が限られており，しかもその場限りで消えてしまうということだろう。この制約のた

めに，特別の機器を用いない，通常の音声によるコミュニケーションでは，情報の発信者（「話し手」とよぶ）と受け手（「聞き手」とよぶ）は比較的近くにいることが必要となる。また伝達される情報量は，話し手と聞き手が覚えておける量，すなわちメモや録音機器などの外的な補助なしに記憶できる量に限られることとなる。こういった特徴は，以下のターンテイキング，フィードバック，文脈の重要性にも現れる。

ターンテイキング

会話では話し手と聞き手が場面を共有しながら交互に話しながらコミュニケーションを行う。このように交互に話す番のことを「ターン」，交互に番をとりながら話すことを「ターンテイキング」という。また，話すことを「発話」，話し手に対する聞き手の反応を「フィードバック」という。会話には，ターンテイキング，フィードバック，場面の共有が欠かせない。

ターンをとることは会話の基本である。ケイとウェルズ（Kaye, K., & Wells, A. J.）は，このような互いに番をとる行動は，すでに授乳といった活動のなかにも見られることを指摘している。授乳に慣れていない母親は，赤ん坊が乳を吸うのを止めると赤ん坊の頬を軽くつついたり，哺乳ビンを揺らしたりして授乳を再開させようと努める。だが，なかなか再開させることはできない。赤ん坊は揺すられるとかえって吸うのを止めてしまうのである。しかし，1週間もするうちに母親はつついたり揺すったりするだけでなく，その後に休止をいれるようになる。その結果，赤ん坊と母親の間に「赤ん坊が吸うのを止める—母親は少し揺すって休む—赤ん坊が吸い始める」というリズムが見られるようになるという。会話に見られる「私が話す—あなたが話す—私が話す」という交替のパターンの素地は，このような活動のなかにも見出せる。

実際，母親は赤ん坊が話せるようになる前から会話に似たパターンで

表11-1　非対称的な会話（Martinez, 1987）

子：（車から犬を出して，母に見せる）
母：そのワンワン，どこに置くの？
子：ここ。（とガス台の上に置く）
母：そこ？　やいちゃうの？
子：（うなずく）
母：（ガス台から犬をとって）ねえ，そこはガス台よ。
子：え？
母：（ガス台をさわって見せ）そこはごはんを作るガス台よ。
子：だめ。
子：（犬を掴み，見る）

話しかけている。例えば，母親は赤ん坊が無言であっても「どうしたの？（間）おねむかな？（間）今日はあったかいねー」などと話しかける。マルティネ（Martinez, M. A.）は，言葉がまだ十分に発達していない幼児に対しても，母親が発問し，応答し，会話を拡張することを示している（表11-1）。このように，幼児の動作やちょっとした発話を養育者が引き延ばし，精緻化することを拡張模倣という。このような会話では，話者間で発話の長さ（発話長）や発話量（平均発話長×ターン数）に差はあっても（会話の非対称性という），互いのターン数には差は見られない（互いにターンをとるので当然である）。

発話長，発話量における会話の非対称性は，母子だけでなく，知識を持っている人物とそうでない人物（教師と生徒），ネイティブスピーカーと言語習得期にある人（母語話者と留学生）などにも見られるが，交互に話すというルールは守られるので，ターン数には差は見られない。

フィードバック

通常の会話では，聞き手は話し手の発話に対し，聞こえている，伝

わっている等の応答ないしフィードバック（反響）を返す。うなずきやあいづちにより「聞いているよ，伝わっているよ」という応答が与えられれば，話し手は安心して発話を続けることができるだろう。話し手からの情報が不十分であったり，聞き手が聞き漏らした場合は，聞き手はけげんそうな顔をしたり間いなおしたりして，情報が伝わっていないことを示す。これを受けた話し手は，発話を繰り返したり，言い換えたり，あるいは声を大きくしたりして，これに応えるだろう。こうしたフィードバックは比較的近接した距離で，すぐに消えてしまう音声コミュニケーションの制約を緩和し，会話に必要な情報処理の負担を軽減すると考えられる。

フィードバックがない，あるいは得られるかどうか分からない音声コミュニケーションは，実際，負荷の高い，あるいは不自然なものとなるだろう。いくつかそのような例をあげてみよう。

＊スピーチや講演：受け手が目の前にいるにもかかわらずフィードバックが期待できないケース。例えば，式典でのスピーチや演説，講演や学校での講義などがあげられる。このような場合，発信者は構造化された文章を順序よく，繰り返すことなく語らなくてはならない。いわば文章の音声化であり，認知的な負担は大きくなる。しばしば原稿が準備されるのはこのためであり，スピーチや演説は文章を暗記することによって行われることもある。

＊呼びかけ声：いるかいないか分からない相手に対して発話する場合には，発話に音程がつく傾向がある。「○○さん，いらっしゃいますかー」，「○○ちゃーん，あーそびーましょう」などである。行商人による「いーしやきーいもー」や「ものほしーさおだけー」などの呼びかけも同様であろう。

＊不特定多数への発話：目の前に聴衆がいたとしても，フィード

バックが期待できない場面では，発話に節がついたり，独特の音程が生じることがある。最近は見かけなくなったが，エレベータの案内係の発話「6階でございまーす。時計，眼鏡，宝石貴金属はこちらでございまーす」やバスガイドの説明「右手に見えますのは○○山でございまーす」などもそうかもしれない。同じメッセージであっても，話し相手が目の前にいて，あいづちをうっていれば，このような音程はつかないと予想される。

呼びかけ声や不特定多数への発話では，どうして音程がつくのだろうか。相手が聞いているかどうか分からないのに声を発するのは不経済であり，無意味な行為かもしれない。これが有意味となるためには，発話はメッセージと「歌」という2重性を持たなければならないのかもしれない。また案内やバスガイドの説明のように，外的な支え（原稿やメモ）やフィードバックの助けなしに長い発話を行うには，メッセージを歌のようにして覚えることが有効なのかもしれない。

文脈の共有

会話のもう一つの大きな特徴として，文脈の共有があげられる。面と向かっての会話であれば，話者同士が同じ文脈を共有しているため，「あれ」「これ」などの指示詞だけの会話も不可能ではない。しかし，例えば電話での会話では，共有できる情報が限定されるため，お互いに情報を補足しあいながら会話を進める必要があるだろう。

モンクとゲイル（Monk, & Gale, 2002）は，ビデオリンク（ビデオの閉回路システム）を用い，話者同士が「相手がどこ／何を見ているか」が分かる条件と分からない条件とでの会話を比較検討した。課題は，話者が聞き手に，例えばベンゼン分子がたくさん存在する顕微鏡画像の特定の位置を聞き手に説明する，というものである。相手がどこ／何を見

ているかが分かるビデオ条件，分からないビデオ条件，音声だけの条件を比較したところ，相手の視線が分かる条件では他の条件に比べ，課題解決に要したターン数，単語数は約1／2であった。

また，クランドールら（Crundall, Bains, Chapman, & Underwood, 2005）は自動車運転中の会話を調べている。条件は，運転手が助手席に座っている相手と会話する条件（道路情報が共有されている）と，運転手が携帯電話を通して相手と会話する条件（道路情報が共有されていない）等であった。その結果，前者においては，混雑した道路では互いの発話数が減少したのに対し，後者では，込み合った道路でも発話量は変化することなく，むしろ上昇する傾向さえあった。道路状況が悪いと運転手はそちらに気をとられがちになる。反応が遅いのを道路のせいだと知らない携帯電話の話者は，運転手にもっと話させようと質問などを行う。その結果，発話量が増加したのだと考えられる。話者がどの程度文脈を共有しているかは，会話の質や量に影響を及ぼすといえるだろう。

2．発話の理解

以上，会話の特徴について見てきたが，ここでは会話における発話に焦点を当て，その理解を支えるプロセスについて検討することにしよう。言語を研究対象とする言語学では音韻論，意味論，統語論，語用論が区別される。音韻論は発音や韻律を研究する学問であり，意味論は語，文，テキストなどの意味を研究する学問である。統語論は語の文の構造，文法を研究対象とし，語用論は言語が特定の発話文脈のなかでどのように運用されるかを研究する。これらの研究学問は認知科学と密接に関わっているが，特に語用論は発話や会話に関する認知科学的研究の発達を促した。とりわけオースティンによる言語行為論，グライスによる会話の公準，そしてサールによる適切性条件の研究は，発話理解に関する認知科学的な実験研究にも大きな示唆を与えた。ここではまずこれ

らの理論について見ていくことにしよう。

言語行為論

オースティン（J. L. Austin）は，発話には①情報を伝達する陳述と②発話すること自体が行為となるような言語行為（speech act）とがあることを指摘した。例えば約束「明日，2時に会いましょう」，要求「引っ越しを手伝ってください」，宣誓「真実のみを述べることを誓います」，命名「この船をアカシア丸と名付ける」，脅かし「言ったらただじゃおかないぞ」などの発話は，情報内容を伝えるだけでなく，聞き手に「2時に会う」，「真実のみを話す」，「船をアカシア丸とよぶ」，「怯える」等，特定の行為を行ったかのような効果をもたらす。このような発話を言語行為とよぶ。

言語行為には以下の三つの種類があるとされる。第1は話し手が発話するという行為そのものであり，発話行為（locutionary act）とよばれる。第2は，約束や要求など話し手が聞き手に伝えようとする意図であり，発話内行為（illocutionary act）とよばれる。第3は，発話が聞き手の感情や行動に及ぼす影響であり，発話媒介行為（perlocutionary act）とよばれる。例えば，話し手が聞き手を「脅かそう」という意図（発話内行為）を持って，「言ったらただじゃおかないぞ」と発話したとする（発話行為）。その結果，聞き手が怖じ気づいたとすれば発話媒介行為がなされたことになる。言語行為論は，発話の理解には，聞き手は意味内容のみならず，話し手の意図や発話がもたらす行為としての効果をも理解しなければならないことを示した。

適切性条件と間接的表現

サール（Searle, J. R.）は，言語行為が成立するのに必要な条件を，言語的な内容（命題的情報）と意図の側面に分け，適切性条件としてまと

めた。適切性条件は以下の四つの条件から成る。

＊命題内容条件：発話の命題内容が満たすべき条件
＊準備条件：発話者および聞き手，場面，状況設定に関する条件
＊誠実性条件：発話者の意図に関する条件
＊本質条件：発話によって生じる行為の遂行義務に関する条件

例えば「窓を開けてください」という要求は「(聴き手が将来) 窓を開ける」という命題内容条件だけでなく，話し手は暑いと感じているとか，窓の開け方が分からないとか，聞き手は窓を開けることができるという状況（準備条件），話し手は聞き手による行為（窓を開ける）の実行を欲しているという話し手の意図（誠実性条件），そしてその発話によって生じる聞き手の義務（本質条件）がそろうことにより成立するとされる。

このような条件がそろうことで言語行為がなされるとすれば，その条件の一部に言及することで，間接的な言語行為がなされるのではないか。例えば「暑いんだけれど」や「窓の開け方が分からない」（準備条件に言及），あるいは「窓を開けてほしい」（誠実性条件に言及），「窓を開けてくれる？」（本質条件に言及）などと発話することで，「窓を開けてください」という要求を伝えることができるだろう。このような考察に基づき，サールは，特定の条件に言及することによって間接的な言語行為が可能であるとした。

仲・無藤（1983）は間接的な要求がどのように作られ，またどのように理解されるかを実験により検討した。大学生に「テニスボールが網の外に飛び出てしまった。そこに人が歩いて来たので…」というような説明文を与え，そのような状況でどのような要求表現が可能かを書いてもらう。得られた要求文を分類したところ，話し手の目標や聞き手の状況

など，表11-2（上）に見られる項目に言究することにより間接的な要求表現が作られることが分かった。

加えて，仲（1986）は，間接的要求の産出に使われる表11-2（上）

表11-2　間接的要求表現と間接的拒否表現

間接的要求表現
（1）　話し手の目標：話し手は辞書を必要としている（「辞書，見たいんだけど」）
（2）　話し手の状況：話し手は辞書を持っていない（「辞書，忘れちゃった」）
（3）　話し手による聞き手の行動の期待：話し手は聞き手が辞書を貸してくれることを期待している（「辞書，貸してもらいたい」）
（4）　聞き手の状況：聞き手は辞書を持っている（「辞書，持ってるよね」）
（5）　聞き手の協力：聞き手は話し手に辞書を貸してくれることについて協力的である（「辞書，貸してくれるかな」）

間接的拒否表現
（1）　話し手の目標：話し手は辞書を必要としていない（「辞書，見る必要なんてないよ」）
（2）　話し手の状況：話し手は辞書を持っている（「ちゃんと探せばあるんじゃないの？」），あるいは持っていなくてもかまわない（「辞書，忘れたってどうにかなるよ」）
（3）　話し手による聞き手の行動の期待：話し手は聞き手が辞書を貸してくれることを期待していない（「辞書，貸してもらおうなんて思ってないよね」），あるいは他の人に期待した方がよい（「○○さんに貸してもらったら？」），あるいは人には期待しないで自分でやった方がよい（「辞書，見ないでやれば？」）
（4）　聞き手の状況：聞き手は辞書を持っていない（「私も辞書，持ってきてないの」）
（5）　聞き手の協力：聞き手は話し手に辞書を貸してくれることについて協力的でない（「辞書，貸してあげない」），あるいは他の人は協力的である（「○○さんなら貸してくれるよ」）

のような項目が，間接的拒否表現にも用いられることを示している。例えば，話し手が「辞書を貸して」と要求した際，聞き手は表11-2（下）にあるような，各要求表現に対応する拒否表現を作ることができる。

3．含意と推論

会話の公準

グライス（Grice, 1975）は発話における「字義通りの意味」と「含意」（推測される意味，背後の意味）とを区別した。そして，字義通りの意味が円滑に伝達されるためには，話者間で以下の四つの約束事が守られていなければならないとした。この約束事を会話の公準という。

（1） 量の公準：必要な情報はすべて提供する，必要以上の情報の提供は避ける。
（2） 質の公準：偽と考えられること，十分な根拠を欠くことはいわない。
（3） 関係の公準：無関係なことはいわない。
（4） 様態の公準：分かりにくい表現，曖昧な表現は避ける，できるだけ簡潔に表現する，秩序立った表現をする。

公準が守られている限り，聞き手は発話を字義的に解釈する。しかし，公準に反する発話がなされた場合，聞き手は字義的意味ではない，第2，第3の意味を推測する。会話の公準が守られていない場合について考察してみよう（仲, 1994）。

＊「量」の違反：必要とされる以上の情報量を提供するような発話である。例えば，八百屋での客の発話「このりんごおいしいかしら？」に対する店員の発話「おいしいよ。ほんとにおいしいよ。

すごくおいしいから買ってよ。とってもおいしいから。…」は「ほんとうはおいしくない」ことを含意しているように聞こえ，客は買う気を失ってしまうかもしれない。

＊「質」の違反：明らかに真実ではないと思われるような発話である。（下手な作品の前で）「これは傑作だ。」これは皮肉と解釈されるだろう。

＊「関係性」の違反：あえて関係性のない発話を行うなど。例えば飲み会で，A「○○さんと△△さん，別ちゃったんだって」―B：「あらこの服すてきじゃない！」など。Aは「この話題は避けるべきなのかな」という含意を引き出すだろう。

＊「適切な様態」の違反：場違いに丁寧な表現など。アルバイトに遅刻したところ，上司に「いまかいまかとお待ちしていましたよ。無事お着きになって嬉しゅうございます」といわれれば「あ，これは嫌みだ」と思うだろう。

村井（1998）はグライスの会話の公準に違反する発話が，どの程度「欺瞞的」だと解釈されるかを検討した。参加者に「AさんはBさんと3年間，恋人としてつきあっています。ある晩，AさんはBさんに電話をしますが，何度かけても留守でした。次の日，Aさんは町で偶然Bさんに会いました。そこでAさんは『昨日の晩，何度も電話をしたんだけれども…』とBさんにいいます。」という物語を示した上で，Bさんの言い訳を提示する。会話の公準に違反しない発話（簡潔，具体的で真実性が高い発話：家族で食事に行ってた）と「様態」の違反（曖昧で長引く発話：電話したんだ…。（間）ちょっと出かけてた）や「質」の違反（真実性の低い発話：えっ聞こえなかった。寝てたから）などを比較したところ，公準に違反する発話の方が，欺瞞度が高いと評定された。

パラ言語的情報

発話にともなう韻律や身振りをパラ言語情報という。パラとは「補足的な，副次的な」という意味である。こういったパラ言語情報も，意図や含意の推論に影響を及ぼすことが知られている。例えば，同じ「考えておくわ」であっても，暗い声で抑揚なしにいう場合と，明るい晴れやかな口調でいう場合とでは，相手に持たせる期待は異なるだろう。

青木（1993）は内容と口調が一致する発話文，一致しない発話文を提示し，発話文の記憶や発話文に対する印象を調べている。発話文は以下のような肯定的，否定的な内容であり，発話口調は肯定的「楽しく，浮き浮きした感じ」か否定的「悲しく，残念な感じ」であった。

＊肯定的：「皆がそろうのは本当に久しぶりね。とても嬉しいわ。いろいろ用意があるから手伝ってちょうだい。今日は天気もいいし，気持ちがよいわね。そういえば，お花を買ってきたのよ。どこに飾りましょうか…」

＊否定的：「せっかくひさしぶりに皆がそろうはずだったのに，がっかりだわ。もう全部用意はしてあるのよ。おまけに雨まで降ってくるし，おちこんじゃうわね。そういえばお花を買ってきたのよ。必要なかったね…」

その結果，同じ発話内容でも口調の違いにより，母親のパーソナリティ（明るい性格の人なのだろう），母親の感情，意志，行動（わざと明るくしている），過去の出来事，事情（家庭がうまくいっていない）などの背後の情報に関する言及に違いが見られた。会話においては複数の情報が同時に処理され分析されているといえるだろう。

おわりに

音声によるコミュニケーション，特に顔をつきあわせての会話は複数の感覚情報に基づくマルチモーダルな活動である。視線，文脈，韻律，言語的内容から意図や含意を推測し，相手と協力して情報の糸を紡いでいく会話は，たいへん魅力的な研究対象であるが，未だ明らかにされていないことも多い。例えば複数の人物による会話の研究などは，これからの研究課題であるといえるだろう。

◉参考文献

J. L. オースティン・坂本百大訳，1989『言語と行為』大修館書店
井上毅・佐藤浩一編著，2002『日常認知の心理学』北大路書房
森敏昭編著，2001『おもしろ言語のラボラトリー』北大路書房．pp. 135-154

◉引用文献

青木みのり，1993『二重拘束コミュニケーションが情報処理および情動に与える影響』教育心理学研究，41，31-39.
Crundall, D., Bains, M., Chapman, P., & Underwood, G. (2005). Regulating conversation during driving: A problem for mobile telephones?. Transportation Research Part F: Traffic Psychology and Behaviour, 8, 197-211.
Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), Syntax and Semantics. Vol.13, Speech Acts, (pp. 41-58). New York: Academic Press.
Martinez, M. A. (1987). Dialogues among children and between children and their mothers. Child Development, 58, 1035-1043.
Monk, A. F., & Gale, C. (2002). A look is worth a thousand words: Full gaze awareness in video-mediated conversation. Discourse Processes, 33, 257-278.
村井潤一郎，1998『情報操作理論に基づく発言内容の欺瞞性の分析』心理学研究，69，401-407.
仲真紀子，1994『会話の発達』『会話の発達を支える要因』『話しことばの特徴』『会話の情報処理』内田編著『読む書く話すの発達心理学』放送大学教育振興会．pp. 19-25，97-121
仲真紀子・無藤隆，1983『間接的要求の理解における文脈の効果』教育心理学研究，

31, 195-202
仲真紀子, 1986『拒否表現における文脈的情報の利用とその発達』教育心理学研究, 34, 18-26
オースティン, J. L.・坂本百大訳, 1989『言語と行為』大修館書店
Searle, J. R. Indirect speech acts. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), Syntax and semantics. Vol. 3. Speech acts. New York : Academic Press. pp. 59-82, 1975.

演習問題

問

会話の特徴に関する以下の記述のうち不適切なものを一つあげなさい。

選択肢

① 母子対話では，母親と子どもにおいてターン数は異なっても発話長などは異ならない。

② 文脈が共有されていないと，ターン数が増えるなど，情報伝達に支障が生じる。

③ フィードバックがあることで，スムーズな情報伝達が行われる。

④ 会話は複数のモダリティにわたる情報処理を要求する。

正解　①

解説

②，③，④は適切な記述である。①は不適切である。母子対話などに見られる会話の非対称性は発話量，発話長などに見られる。ターン数には差は見られないのが普通である。

問

下記の用語の組み合わせとして不適切なものを一つ選びなさい。

選択肢

① 発話行為，オースティン
② 含意，字義的な意味
③ サール，間接的要求
④ 会話の公準，準備条件

正解 ④

解説

発話行為はオースティンが提唱し，グライスは含意と字義的な意味を区別した。また，サールは間接的要求について適切性条件という観点から考察している。よって①，②，③はそれぞれ適切な組み合わせである。④の会話の公準はグライスによるものであり，準備条件はサールによるものであるので，④は組み合わせとして適切ではない。

問

以下の記述のうち，パラ言語情報とはいわないものを一つ選びなさい。

選択肢

① 表情
② 身振り
③ 発話内容

④　抑揚

正解　③

解説

発話にともなう韻律や身振りをパラ言語情報という。パラとは「補足的な，副次的な」という意味である。よって，①，②，④はパラ言語情報となり得る。③は，発話内容（言語情報）そのものであるので，パラ言語情報とはいわない。